

論文

## 人物埴輪の製作技法からみた古墳時代後期の常陸

大村冬樹

現在の茨城県は、古墳時代後期に埴輪が盛んに生産された地域とみられる。そのため、これまでに多数の埴輪工人体制に関する研究が進められ、在地型埴輪と呼ばれる埴輪が設定されてきた。しかし、近年ではこれらのみならず、複数の特徴的技法により製作された埴輪が同一の古墳から出土する例もみられることから、複数の工人集団が関与していた可能性も想定される。よって本稿では、各遺跡から出土した埴輪の破片資料をもとに製作技法を観察し、異なる作風の人物埴輪が出土し

た地域間の埴輪を時期毎に関連項目とともに比較検討した。

これらの分析と各地域の古墳築造規模の変遷を重ね合わせ、古墳築造関連事業における埴輪生産について考察した。

人物埴輪生産は開始当初は簡素な技法を用いていたが、在地の地域首長に従属した工人集団の編成を経て、最終的には製作技法の簡略化とともに衰退したことが推察される。これは、古墳時代地域社会の衰退に伴う社会の変化を反映したものと理解できる。

### I. はじめに

茨城県の古墳時代研究は『常陸の古墳群』（佐々木・田中編 2010）にみられるように、関東でも古墳が集中して分布する地域として盛んに進められている。また、それらの多くの古墳には円筒埴輪のみならず形象埴輪も樹立されており、地域毎に異なった様相を呈している。埴輪の生産は3世紀から4世紀にかけて畿内を中心として栄えたと推測されるが、その後は関東地域で隆盛を迎え、6世紀後半まで続いたことが明らかになっている。また、近年の埴輪に関する研究は下総や北武蔵を対象として実物資料に基づいた細分化が進んでおり、同工品分析によって工人単位の識別作業が行われている。

ここでいう工人集団とは、埴輪を専門に製作していた專業集団を想定している。古墳には多数の埴輪が配置される場合が多く、その種類は円筒埴輪と動物埴輪や器財埴輪などの形象埴輪に分類できる。特に、形態が複雑な形象埴輪の製作は熟練した工人が担当していたことが推察される。

埴輪生産は関西地方から関東に伝播したのち、在地の工人集団によって人物埴輪が盛んに生産されるほど発展した。この背景には、中央の大和政権と地方首長の間の交流が大型古墳の築造と埴輪生産を通して関係していることが窺われる。関東における埴輪生産は地域を統括していた首長の下で大規模に行われていたとみられ、地域社会における有力者と大和政権の関係を明らかにするために有力な手掛かりになると考えられる。それらの工人集団の動向に迫るためには、資料痕跡の観察に基づき各地域における工人の特徴を抽出することが必要不可欠である

第1表 参考資料点数

地域	No.	遺跡名	頭部	胴部	上腕部	前腕部	草摺/裾	脚部
北部	1	川子塚古墳	0	1	1	0	1	0
	2	舟塚1号墳	2	2	3	3	3	0
	3	銚の宮1号墳	2	2	2	2	0	0
	4	白方5号墳	6	0	10	5	0	0
	5	幡山26号墳	2	2	3	4	0	0
	6	中道前5号墳	12	3	21	12	3	0
	7	田彦1号墳	1	1	1	0	2	0
	8	一騎山4号墳	5	0	1	0	2	0
	9	西大塚3号墳	2	0	3	2	2	0
	10	吹上1号墳	2	1	2	0	0	0
中央部	11	三味塚古墳	6	1	11	7	0	0
	12	杉崎88号墳	2	2	4	4	2	0
	13	舟塚古墳	11	3	21	16	8	4
	14	不二内古墳	2	1	2	2	1	1
	15	トノ山古墳	1	1	2	2	1	0
	16	西町古墳	2	2	5	4	1	0
	17	二子塚1号墳	1	0	3	1	0	0
	18	北屋敷2号墳	4	2	6	5	1	0

ため、本稿で扱う資料の大部分は博物館もしくは埋蔵文化財センターの協力を得て実見した。この分析によって、資料を再整理して分類を行うと同時に、常陸における古墳築造体制研究を進めるための基盤としたい。

## II. 関東における埴輪生産研究の意義と課題

現在の群馬、埼玉、茨城県域からは全国的にみても多くの人物埴輪が出土しており、埼玉県鴻巣市生出塚遺跡などの大規模生産遺跡からは、埼玉古墳群をはじめとして首長墓への埴輪の大量供給や遠隔地への供給体制が指摘されている<sup>1)</sup>。このような状況を踏まえ、埴輪の器種の中でも最も多様な技法が用いられている人物埴輪の製作技法を分析することによって、複数の工人系統を把握するべきであると考え。関東南部においては、小橋健司により千葉県山倉1号墳出土埴輪の同工品分析がなされ(小橋他2004)、工人を熟練度毎に分類している。この分析では、形象埴輪が円筒埴輪に比べ個体数が少なく、規格化が困難なことを反映していると述べている。また、埴輪の生産面での特徴としては、製作物が手元に残らないために形状の変化が製作機会毎に生じる傾向があることから、埴輪製作工人を識別するためには古墳毎に分析結果を積み重ねることが重要であるとしている。

出土した人物埴輪の器台突帯や裾部の省略に着目し、工人を段階別に分類して製作組織のモデルを示したのが城倉正祥の研究である(城倉2005)。この中で城倉は、集団の中において全

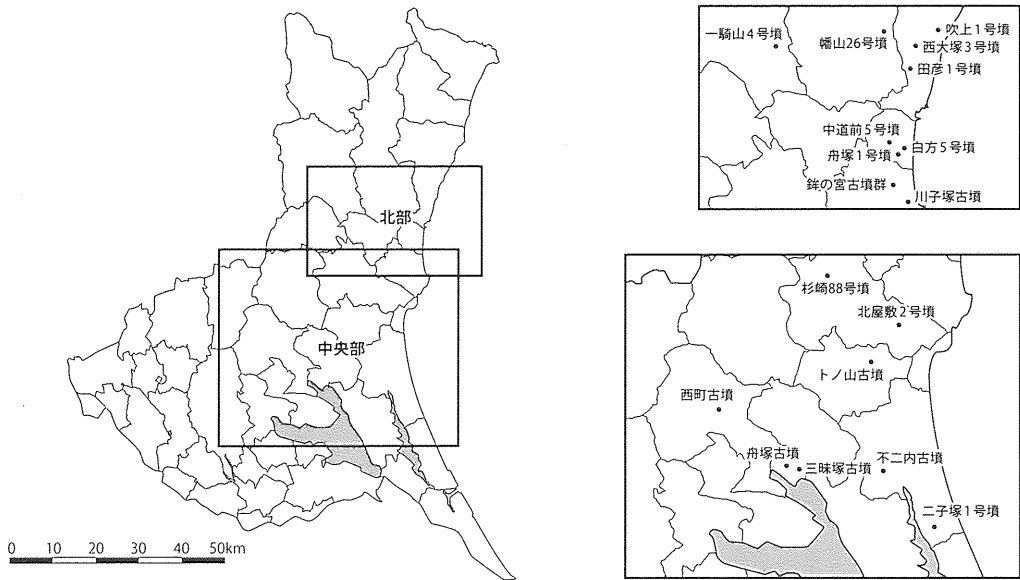
での製作者の関係は等質ではなく、工人間の関係には疎密があったと想定している。その結果、細部まで丁寧に調整する製作者、粗雑な作りの人物埴輪のみを製作する製作者、円筒埴輪のみを安定して作る製作者の3類型に工人を分類した。また、埼玉県と千葉県九十九里における埴輪生産体制の分析に際して製作技法と表現の両視点から工人単位の識別を行い、埴輪の詳細な分析から埴輪生産の多様な展開過程を復原し、地域社会の中に位置づけることで古墳時代地域社会の具体像に迫った（城倉 2009）。

これらの研究に代表されるように、埴輪の表面痕跡からは個人にまで迫れるほど繊細な分析が可能である。また、それらの積み重ねによって古墳毎の工人集団単位を復元することで在地首長の交流範囲が明らかになったといえる。特に、円筒埴輪を中心として数百個体の資料を対象に精緻な分析が続けられてきたことは重視すべきである。しかし、広範囲に影響を与えた大規模な工人集団に関しては、特徴的な製作技法を対象として在地の工人集団と他地域から流入してきた工人集団の技法を明確に峻別することが求められていると筆者は考える。これまで常陸においては工人集団が地域的な独自の技法を創出し継続して埴輪を製作していたといわれてきたが、部位が特定できる破片を再検討することで新たに製作集団の特徴を把握することが必要である。小幡北山型人物埴輪に代表されるように、これまでの多くの研究では復元された少数の埴輪の作風と腕の製作技法を中心として議論されていた点については、他の部位に注目したさらなる分析が可能といえる。同一古墳の資料に複数の工人による製作と考えられる製品が指摘される事例があるため、小幡北山型埴輪が出土した遺跡全ての年代が必ずしも同時期ではないと推測される。このことから、埴輪生産は久慈型や小幡北山型などの単一技法をもつ工人集団によって継続されていたのではなく、工人集団は時期毎に変化しながら他地域に影響を与えていた可能性が強いと推察される。以上を踏まえ、先行研究で主に焦点が当てられてきた作風と腕の製作技法以外に、頭部などの項目も加えて工人の編成と埴輪製作技法の変化を検討したい。

### Ⅲ. 表現と製作技法

#### 1. 分析対象地域（第1図）

本稿で分析地域とする茨城県に関しては、『茨城県古墳総覧』（茨城県教育庁社会教育課 1959）などの集成においても、前方後円墳の数が突出していることが取り上げられてきた。その中で古墳時代前期から後期にかけて前方後円墳を含む古墳群・群集墳が連続して築造され、多数の埴輪が生産供給されたと考えられる範囲は大きく2地域に分かれている。すなわち、那珂川、久慈川流域を中心とする北部地域（以下、北部）と、霞ヶ浦周辺域を中心とする中央部地域（以下、中央部）に分類される地域で、本稿ではこれらの2地域から出土する人物埴輪の製作技法を分析し、一定地域内における同一工人集団による生産体制の裏付けを行った。なお、龍ヶ崎市などの茨城県南部においても人物埴輪は出土しているが、作風や製作技法の点で下総から出土した資料にきわめて類似していることから、分析対象には含めていない。



第1図 分析対象地域

## 2. 常陸における在り型埴輪（第2図）

ここで、先行研究によって指摘されている代表的な在り型埴輪を挙げておきたい。まず、霞ヶ浦沿岸から那珂川流域においては、上半身と下半身を別々に成形し焼成後に組み合わせる分離成形技法による全身立像が製作され、「常陸型人物埴輪」とされている（日高2000）。なお、分離成形技法は複数の埴輪工人集団によって共有される技法であることから、「常陸型人物埴輪」に女子像を加えた人物埴輪は「小幡北山型人物埴輪」とされている（稲村1999）。これらは玉里舟塚古墳を中心として、不二内古墳など霞ヶ浦沿岸から那珂川下流域を中心に分布している。しかし、これらの分離成形による人物埴輪は出土した古墳毎に表現に異なる点が見受けられる。この小幡北山型人物埴輪は茨城県内で最大規模を誇る小幡北山埴輪製作遺跡で生産されたと考えられている。製作技法に関しては、腕が粘土紐巻き上げによって円筒成形される点もこの地域に特徴的といえる。また、目は木の葉形に切り取られたものが多い。武装男子に関しては、挂甲札がいずれも格子状線刻によって表現される点が共通する。

一方、久慈川流域に分布する特徴的な人物埴輪は、腕を木の棒に粘土を巻いて成形する技法と粘土紐に板押圧をする技法の2つの製作技法を中心に製作され、車崎正彦によって「久慈型人物埴輪」として設定された（車崎1980）。この他の特徴は、頭部成形を行う際に顎の周辺を内側から押し出して顎の先端を尖らせ、表現としては半月形（下弦凸レンズ形）を呈する眼孔の形状、挂甲の小札が連続弧形線刻によって表現されていることである。しかしながら、久慈型埴輪の一つとされる白方5号墳では腕の製作技法が中実と中空の両方がみられるなど複数の技法が指摘されているため、複数の工人集団の関与が窺われる。

### 3. 分析方法

人物埴輪の部位毎の破片を対象に内面観察を行った。全身が復元されている資料のみならず、主に破片資料の内面に施されたナデなどの「調整」の観察が分析の中心である。まずは、これまでの筆者の観察結果をもとに腕部と頭部の製作技法を分類した。茨城県の資料を分析する前提として、関東各県の複数の埴輪資料を実見し、各資料の製作技法を比較・検討した結果、群馬・埼玉・千葉の各県と茨城県の資料では粘土紐の接着方法やナデを施す部位などに技法が大きく異なる点が認められた。このことから、本分析では茨城県のみにもみられた上腕部と頭部の技法に着目し、先行研究において分類された内容も含め以下のように再分類した。

はじめに、最も資料数が多く内面観察が容易な上腕部の製作技法を挙げたい。

#### ①中実 A 技法

棒状の粘土を肩部に差し込む最も簡素な技法である。主に群馬県・埼玉県地域で多くみられる。粘土紐または板状粘土をさらに巻きつけることで太くしているものもある。

#### ②中実 B 技法

木芯中空技法とも呼称される技法で、木の棒を芯として粘土紐を巻きつける。中空部分は6mm前後のほぼ真円（第3図）であり、両端が閉塞されるものがあることから成形過程で心棒を抜き取らないものが存在するとみられる。実際は中空の造りであるが、成形時に中実技法同様に肩部に差し込んでいることから、本稿では中実技法と同類に区分する。

#### ③中空 A 技法

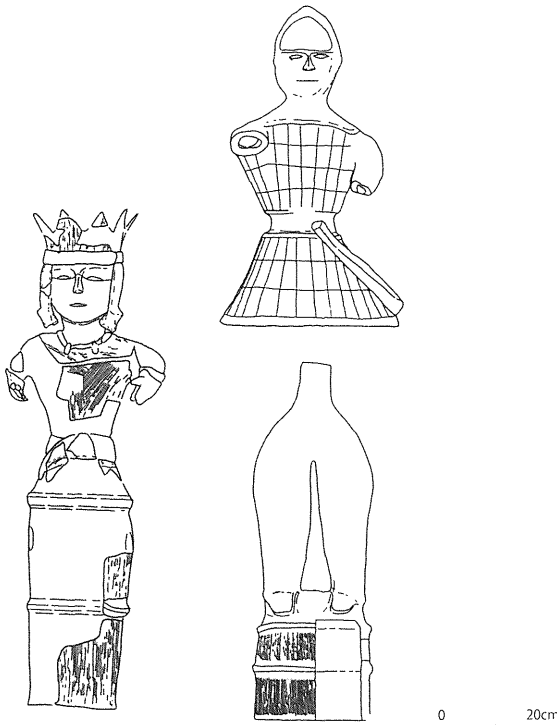
小さい板状粘土もしくは粘土紐を巻き上げ、手首に近い部分まで中空にする技法。

#### ④中空 B 技法

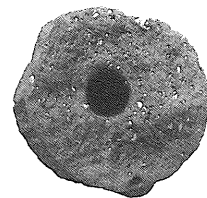
粘土紐を巻き上げて内面を中空に成形する技法で、内面にはナデを施さないものが多い。中空に成形した上腕部に比較的短い前腕部を差し込む。

#### ⑤中空 C 技法

上腕部は中空 B 技法同様に粘土紐を巻き上げて成形するが、より長い中実の前腕部が差し込まれる。



第2図 久慈型人物埴輪（左）・小幡北山型人物埴輪（右）



第3図 中実 B 技法の腕断面

次に、頭部の製作技法である。頭部内面にはナデが施される場合が多く製作技法が不明なものも存在するが、内面に痕跡が残るものは、頭部を胴部とは別に製作し後から頸部に差し込んで接合するものと、頸部から直接粘土紐を巻き上げて成形するものに分類される。まずは頭部輪郭成形技法、すなわち顔面の輪郭を成形する技法は次のパターンに区分した。

①粘土板貼付

頭部側面及び顎の輪郭を表すため、顔面の形状（円形もしくは半円形）の板状粘土を貼りつける。

②内面からの押し出し

顎部内面から指頭で押圧することで、顎の張り出しを成形する。

③粘土紐貼付

外面に貼り付けることで、顎を表現するものがある。明瞭に段をつくるものと、ナデにより段差を無くし滑らかな曲面にするものがある。

女子埴輪の頭部の形態は、塚田良道によって髻による閉塞を基本として3類型に分類された(塚田 2007)。同様に、男子埴輪の頭部閉塞技法にも複数の技法が観察されたため、以下の通り分類する。ただし、冠帽の種類によって成形方法が異なる場合もある。

①連続成形

成形した頭部下半から続けて粘土紐を輪積み、もしくは巻き上げにより頭頂部まで塞ぐ方法。

②上半部別成形

頭上半部を分割して製作し、既に成形した下半部と組み合わせて成形する技法。

③開放形

粘土紐巻き上げにより大部分を成形し、頭頂部を閉塞せずに開いた状態にする。主に鋸歯状冠等のかぶり物を被る人物を表現するためにみられる。

この他に、脇部穿孔、目の穿孔形状、指の成形技法、挂甲線刻の形状を外見的表現として観察した。

#### IV. 分析

ここでは、古墳の年代毎に各古墳の主要な人物埴輪について検討したい。なお、分析対象とした古墳は中央部8基、北部10基の合計18基である。主な表現・製作技法は第2表、第3表に掲載することとして、ここでは各古墳の規模と年代に関する概要および特筆すべき技法を中心に記載する。また、各地域の古墳を時期別に比較するため、常陸中央部の埴輪をC1群（6世紀初頭）、C2群（6世紀前葉 - 中葉）、C3群（6世紀後葉 - 末葉）、常陸北部の埴輪をN1群（5世紀末 - 6世紀前葉）、N2群（6世紀中葉）、N3群（6世紀後葉）、N4群（6世紀末葉）とした。

第2表 常陸中央部の主な人物埴輪製作技法

分類	古墳	製作技法											表現							
		頭部					上腕部					指成形	脇穿孔	目の穿孔形状			挂甲線刻			
		開放形	閉塞		輪郭成形		中実A技法	中実B技法	中空A技法	中空B技法	中空C技法	摘み出し		切り込み	貼り付け	楕円形	木葉形	半月形	直線	連続弧形
			巻き上げ連続成形	上半部別成形	粘土板貼付	顎外面粘土貼付							顎内面押出し							
C1 群	三味塚古墳	○		○		○			○	○	○			○						
	杉崎88号墳	○				○								○	○					
C2 群	舟塚古墳	○		○		○			○			○		○	○	○	○			
	不二内古墳	○		○		○			○					○	○		○			
	トノ山古墳	○				○			○			○		○	○					
C3 群	二子塚1号墳		○			○								○						
	北屋敷2号墳			○		○				○		○	○	○		○	○	○		
	西町古墳			○		○					○	○	○	○		○				

第3表 常陸北部の主な人物埴輪製作技法

分類	古墳	製作技法											表現							
		頭部					上腕部					指成形	脇穿孔	目の穿孔形状			挂甲線刻			
		開放形	閉塞		輪郭成形		中実A技法	中実B技法	中空A技法	中空B技法	中空C技法	摘み出し		切り込み	貼り付け	楕円形	木葉形	半月形	直線	連続弧形
			巻き上げ連続成形	上半部別成形	粘土板貼付	顎外面粘土貼付							顎内面押出し							
N1 群	舟塚1号墳			○		○						○					○			
	銚の宮1号墳		○					○					○							
N2 群	白方5号墳		○	○		○	○		○			○	○					○		
	幡山26号墳				○	○	○				○									
N3 群	中道前5号墳	○	○			○		○					○					○		○
	田彦1号墳		○			○		○										○		○
	西大塚3号墳		○			○	○	○					○					○	○	
N4 群	一騎山4号墳			○		○	○			○								○	○	
	吹上1号墳		○			○								○						

1. 常陸中央部

(1) C1 群

人物埴輪が出土している最も早い段階の古墳として、三味塚古墳と杉崎88号墳が挙げられる。三味塚古墳は霞ヶ浦の東岸に位置する85mの前方後円墳である。内部構造から、6世紀初頭から前葉に位置づけられる。円筒埴輪のほかに鹿、牛、犬などの動物埴輪も出土している。また、内原平地丘陵奥部に展開する杉崎古墳群は東関東に特徴的な「前方後円形小墳」が主た

る存在（岩崎 1992）とされ、これらの古墳から出土した人物埴輪には、同一の製作技法によって小型に成形されたと推測される部位が認められる。その一例として、三味塚古墳の人物頭部は粘土紐を頸部に貼り付けることで顔面の輪郭を成形していることが挙げられる。粘土紐の貼付けが弱いために、剥離してしまっているものが散見される（第4図：1）。髪形から男子と女子に分類されるが、これらが複数の異なる技法によって成形されていることが口の穿孔方法から確認された。切り口の形態から刀子などの工具を使用したとみられ、大きく木の葉形に切り開くもの以外に、小さく切り込みを入れるのみで反対側まで貫通させないものがある（第4図：1内面）。これらは頭部形態も球形と筒形で若干異なるため、工人差が表れたものと推測される。なお、頸部の内面には巻き上げ痕が明瞭に残っている。頭頂部の形状は横幅が広い頭巾形と球形に分けられる。その閉塞方法は粘土紐輪積みによるもので、内面にはナデが施されていない。また、腕は板状粘土もしくは粘土紐の巻き上げによって中空に成形している。しかし、杉崎 88 号墳出土埴輪の腕はいずれも中実技法によって作られている。胎土の色調は個体毎に異なるが、全て同様の技法によって製作されている。また、三味塚古墳の半身像の裾部には、板状粘土を巻きつけて成形している痕跡がみられた（第4図：3）。

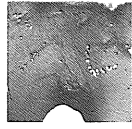
杉崎 88 号墳からは腰に手をあてる半身像、左手を斜め上に右手を下に向ける半身像、そして襷をかける女子像が出土している。三味塚古墳同様、全身像ではなく半身像のみが出土している。これらの人物埴輪はいずれも頸部が括れずに頭部が胴部から連続成形され、頸部外面に僅かに粘土紐を貼りつけている。さらに、腕は中実技法であるが胴部に差し込まずに、上半身の側面に接着しているのみである。以上のように、常陸中央部における人物埴輪出現段階にはいずれも簡素な技法により小型の半身像を製作しており、内面にほとんどナデを施さないという特徴が共通する。

## （2）C2 群

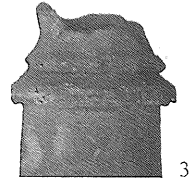
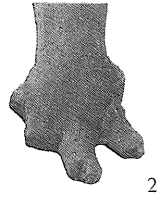
この時期の埴輪は前述の小幡北山型埴輪に該当する一群であり、腕が中空 B 技法である点をはじめ、多くの共通点が指摘されている。分析対象とした中で最も多くの埴輪が出土した玉里舟塚古墳（以下、舟塚古墳）は標高 18m の台地上に展開する古墳群中の前方後円墳である。稀有な二重箱式石棺で知られる、全長 74m の古墳である。造り出しには武人、盾持人、女子、馬形、家形など多くの形象埴輪が立て並べられていた。

多数の形象埴輪片が出土しているため、人物埴輪は全て復元すれば 20 体以上になると考えられる。頭部は輪積みにより成形した後に、内部を丁寧に撫でている（第4図：4内面）。頸部には粘土紐を貼り付けたのち、丁寧にナデを施して滑らかな曲線を形成している。さらに、頸部内面には若干の押圧を加えた痕跡がみられる。頭部は先の三味塚古墳に比べ一回り大きく別成形したものを頸部に差し込んでいることが断面からみてとれる。これらは武人と女子の違いはあるものの、製作技法には大きな違いはみられない。なお、腕が巻き上げ中空成形（第4図：5）のため、中実技法のように差し込むのではなく、肩の板状粘土と腕を接着している。内面

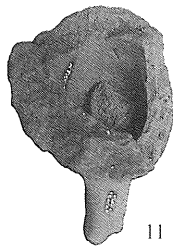
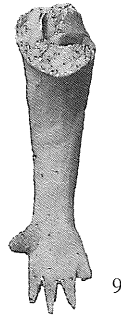
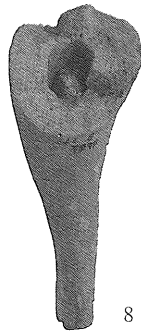
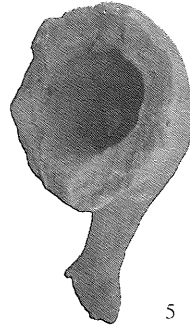




内面



内面



- 1-3: 三味塚古墳  
 4-6: 玉里舟塚古墳  
 7, 8: 北屋敷2号墳  
 9: 西町古墳  
 10, 11: 二子塚1号墳

- 頭部: 1, 4, 7, 10  
 腕部・指: 2, 5, 6, 8, 9, 11  
 半身像裾部: 3

第4図 常陸中央部の主な人物埴輪

にナデが施されるものもあるが、基本的に同様の技法とみられる。武人埴輪の挂甲表現として胴部と草摺には細く深い格子文が施されているため、工具を用いたものと推測される。

指は工具で粘土塊に切り込みを入れ、1本ずつ撫でて成形している。全体的に指が欠損しているものが多いが、指の付け根には工具によって切り込まれた痕跡がみられる。この技法はトノ山古墳などでも採用されており、草摺部分の端部を成形する際にも刀子などを使用している点からも、工具を多用して成形していることが特徴の一つといえる。なお、親指のみ手の平から垂直に突き出すように粘土塊を貼り付けることで成形している（第4図：6）。舟塚古墳の破片からは20体以上の人物埴輪が復元できると考えられ、槍を握る姿勢の武人埴輪など他に類例のない埴輪も出土している。

このように舟塚古墳からは多くの武人埴輪が出土しているのに対し、茨城町に所在するトノ山古墳からは半身像が一体確認されているのみである。目の形状が木の葉形であり、冠帽が鋸歯状の形を呈するなど、舟塚古墳と共通する作風が窺われる。腕の製作技法は中空巻き上げ技法により肩にかけて徐々に太く成形するというのも、中空B技法の埴輪の特徴といえる。頭部は冠をかぶり、内面にはナデが施されている。目や口などの作風も舟塚古墳に近似している。指の成形方法も刀子などの工具による切り込みが共通するが、放射状に開く形にする点で舟塚古墳とは若干異なる。また、頸部の括れが小さい点が特徴的であり、連続して成形した可能性が考えられる。

不二内古墳は全長65mの前方後円墳と推定されているが、現在、墳丘はほぼ削平されている。人物埴輪の出土数は数少ないが、人物埴輪の器種は壺を捧げる女子、跪く男子、衝角付胄と挂甲の武人など、多様な埴輪が確認されている。外見からは分離成形技法などの技法と線刻表現などで舟塚古墳のものと類似しており、腕は粘土紐巻き上げによる中空成形である。また、分離成形された脚部を粘土紐の渡しによって接合し、腰部から次第に細く成形したのち外面にナデを施すという製作技法の共通点からも、両古墳の埴輪がきわめて近い時期に製作されたことが窺われる。

### （3）C3群

石岡市に所在する西町古墳は現在では削平されているため、埋葬施設などの詳細は不明であるが、形象埴輪は人物の他に鹿・家などが発見されている。人物埴輪は男子像と襷をかけた女子埴輪が出土しており、半身像の腕は中空技法による成形とみられる。ただし、先行する舟塚古墳と比較すると、中空の上腕部に差し込まれた前腕部分が長いことが特徴である（第4図：9）。同様の技法は後述するように二子塚1号墳、北屋敷古墳にもみられる。この時期に中実の腕の製作技法が多用されることから、中空から中実の腕へとつくりが簡略化していく時期と理解したい。指の成形は刀子による切り込みであるが、舟塚古墳のように5指が平行ではなく、刀子による切り込みにより放射状に成形している。また、頸部に貼り付けている粘土は少量のため、前段階のトノ山古墳の埴輪と作風が共通する。

二子塚1号墳は北浦に面する舌状台地の平坦な台地上に位置する前方後円墳である。出土した帽子をかぶる人物埴輪の頭部は比較的面長（第4図：10）で、頭上部内面を観察した結果、輪積み痕が残存しているのがみてとれた。また、肩部から連続して頭部を成形するなど、製作技法の一部には久慈型埴輪の特徴がみられる。しかし、目の穿孔形状は目頭を丸く目尻を鋭く切り込んでおり、他の古墳の埴輪にはみられない様相を呈している。

北屋敷2号墳は那珂川右岸の東南台地上に位置する遺跡である。墳丘の調査が完全に行われていないため形態、埋葬施設、年代などの詳細は不明である。人物埴輪には舟塚古墳と作風が共通する点が多く、同一の製作工人による製品と考えられてきた。しかし、若干の時期差がある事に加え、製作技法にも舟塚古墳とは異なる点がみられた。武人男子の目の形状は久慈型人物埴輪に近い、半月形（第4図：7）を呈している。また、他の同時期の埴輪と同じく、差し込まれた前腕部が長い（第4図：9）。以上のことから、腕は巻き上げ中空技法により成形しているが、前腕部を伸長して中実技法へ移行する段階と捉えられ、さらに久慈型人物埴輪の表現・技法的特徴を取り入れたと推測できる。

## 2. 常陸北部

### (1) N1 群

ひたちなか市に所在する川子塚古墳は人物埴輪が出土する初期の古墳として位置づけられる。太平洋を望む那珂台地の縁辺部に立地し、墳丘には葺石、円筒埴輪、形象埴輪が確認されている。円筒埴輪にB種横ハケ（川西1978）がみられ、年代は5世紀後半-末葉とした。川子塚古墳からは半身像1体（第5図：1）のみが出土しており、外面はナデ調整を中心として胴部には若干のハケ調整が施されている。上腕部が僅かに残存しており、中空に成形している。しかし、断面が正円形ではなくねじれて歪んでいるため、板状粘土を巻いた後に折り曲げて成形したと考えられる。また、板状粘土の貼り合わせにより胴部を成形したことがみてとれるが、剥離している部分が数か所みられる。さらに、この半身像の裾部断面には、板状粘土を重ね巻き成形している（第5図：1下部拡大）ことが下端部分にみられる。しかし、胴体上部の成形方法までも同様であるかは判別できない。

これに対し、全長38.5mの前方後円墳である東海村の舟塚1号墳からは分離成形の上半身が出土しているが、川子塚古墳とは造りが異なる部分もある。腕の断面に小孔が確認できることから、全て中実B技法による製作と考えられる。頭部は前面の三角冠帽を支えるように閉塞し、顔面の輪郭は粘土紐の少量貼り付けによるものとみられる。鋸歯状の線刻や彩色が全体に施され、後に久慈型として定着する埴輪が丁寧に製作されたものと推測される。

また、鉾の宮古墳群から出土した埴輪はこれとは異なる技法によるものである。鉾の宮1号墳は径20mの円墳であることが確認され（勝田市教育委員会1975）、1号墳の墳丘には円筒埴輪と朝顔形埴輪、馬形埴輪、人物埴輪が立て並べられていたが、いずれも原位置が判明しているものは存在しない。人物埴輪は褌をかける女子埴輪と男子埴輪が出土している。2体の上半



1: 川子塚古墳  
2, 3: 鉢の宮1号墳  
4: 白方5号墳  
5: 幡山26号墳

6, 7: 中道前5号墳  
8: 田彦1号墳  
9: 西大塚3号墳  
10-12: 一騎山4号墳

頭部: 2, 6, 7, 8, 10  
腕部: 3, 4, 5, 11, 12  
胴部: 1  
上半身: 8  
武人胴部: 9

第5図 常陸北部の主な人物埴輪

身は、いずれも顔面はほぼ欠損しているが、頭部内面上部には明瞭に巻き上げ痕が残り、ナデ調整はしていない。腕は手首まで中空に成形され、内面にはナデの痕跡がみてとれる（第5図-3）。以上のように、初期の製作技法には古墳毎に異なる点が多いが、板状粘土によって裾部や上腕部を中空に成形する技法は北部においても用いられている。

## （2）N2群

1基の古墳から出土した埴輪に複数の製作技法が認められた。まず、白方東南台地に沿って分布する白方古墳群の5号墳が挙げられる。5号墳は古墳群の南西に位置し、現在では完全に削平されているが全長約27mの前方後円墳と推定されている。円筒埴輪の特徴から、6世紀中葉のやや新しい時期と考えられる。武人埴輪、振り分け髪男子埴輪、盾持人埴輪が多数出土している。本古墳出土埴輪には、頭部と腕の製作技法に複数の特徴的な技法がみられた。まず、頭部の輪郭成形技法には、内面からの押し出しによる技法と、外面に粘土紐を貼り付ける技法によるものがある。頭頂部内面の痕跡からは、閉塞技法に輪積み技法と別作り技法の2通りの技法が用いられていたことが知られる。腕も同様に、大半の中実B技法と共に中実A技法と中空B技法によるものが1点ずつみられる（第5図:4）。これに関連して指の成形方法には粘土塊に指となる粘土紐を貼り付ける技法と、粘土塊に刀子で切り込みを入れて親指のみ手の平に粘土紐を貼り付ける技法がある。また、中実B技法の上腕部には肩に差し込む部分を潰して尖らせているものと、芯棒を入れた状態で胴体に差し込んだために穴が貫通しているものがある。以上の技法パターンから、複数の工人集団によって製作された可能性が考えられる。

久慈川の支流里川左岸の台地上に位置し、前方後円墳2基、円墳21基、方墳1基から構成される幡山古墳群の26号墳は、前方後円墳であれば全長45mになると報告されている（高根信他1977）。この古墳から出土した人物埴輪は、本地域ではあまりみられない技法により製作されている。頭部輪郭成形には、北部地域では稀な顔面全体に粘土板を貼り付けるものと、内面からの押し出しによるものがある。胴部を肩まで成形した後に穿孔し、腕を差し込んでいく。腕は中実B技法と中実A技法の両方が出土しているが、ここでは腕の端部の成形方法について触れておきたい。一般的に、腕を胴部に差し込む箇所は尖らせるなどして成形するものが多いが、本古墳出土資料に関しては工具により面取りがなされるという特徴がある（第5図:5）。下半身に当たる資料は発見されていないが、上半身が比較的大型であることから全身像の可能性が高い。この段階の埴輪には複数の技法がみられ、中には在地的な技法も確認されることから、すでに複数の工人集団によって異なる器種の埴輪が古墳に供給されていたものと推定される。

## （3）N3群

北部の古墳の中では、中道前5号墳（茅山古墳）から最も多くの埴輪が出土している。中道前古墳群は前方後円墳1基、円墳4基の計5基が確認されている（稲村他2006）。そのうち5号墳は小学校建て替え工事の際に削平されたが、全長約40mの古墳が想定されている。古墳

の築造時期に関して黒澤彰哉は帆立貝式古墳の主軸平行型を根拠に6世紀後葉に位置づけた(黒澤2005)が、稲村繁は埴輪の変遷表をもとにTK10併行期(6世紀中葉)に比定している(稲村2006)。5号墳からは武人埴輪、女子埴輪、跪く人物埴輪、盾持人埴輪、力士埴輪が出土している。C2群と同様に武人埴輪が多くを占めているが、全体像が判明している資料はいずれも半身像である。頭部はいずれも粘土紐巻き上げ成形によって閉塞している(第5図:6)。頸部は内面からの強い押し出しにより成形している。頭上部外面には刷毛目痕が残り、ナデつけが粗雑な内面とは異なり外面は刷毛目調整により形を整えている。また、頸部から頭部にかけては粘土紐巻き上げによる連続成形であり(第5図:7)、別成形ではない。腕は断面の中心部に丸い小孔が確認できることから、中実B技法により成形されたことが明らかである。また、上腕部の胴部に差し込む部分にも穴が空いており、いずれも腕を成形した後に心棒を抜き取って胴部に接合したものとみられる。指の成形方法は手の平となる板状粘土塊に粘土紐を接着する方法により貼りつけている。この他に、武人埴輪の胴部外面は刷毛調整を施し、草摺には幅が太く浅い連続弧形線刻が施されていることが、ナデと工具を多用する中央部とは異なる特徴といえる。

同様の成形方法による人物埴輪は、他の同時期の古墳からも出土している。例えば、勝田市の那珂川支流、早戸川によって侵蝕される緩やかな那珂台地上に位置する田彦1号墳が挙げられる。この古墳群は前方後円墳1基、円墳21基から構成されるが、現存するのは円墳1基のみである。出土した埴輪はほとんどが散逸しており、人物埴輪2体のみが現存している。武人埴輪の半身像は頭部から胴部まで残存している(第5図:8)。目は半月形で、腕の断面から中実B技法によって製作されたことが明らかである。線刻は連続弧形であるが、交点には粘土粒が貼り付けられる。又、別個体とみられる半身像の武人埴輪の大刀は、線刻を施した後に貼りつけている。

西大塚3号墳から出土した埴輪は破片資料が大半を占めるが、本古墳においても多くの共通点が認められる。西大塚古墳群は日立市の久慈川に面する台地の先端に位置し、前方後円墳1基、円墳と推定される3基からなる小古墳群である。埴輪が出土した古墳は1,3号墳であるが、1号墳は円筒埴輪しか出土せず、形象埴輪は3号墳から出土した可能性が高い。管玉に片側穿孔するという特徴から6世紀代と考えられる。西大塚3号墳から出土した人物埴輪も中道前5号墳と田彦1号墳と同様に、全て武人埴輪である。目の形状は半月形、腕はほとんどが中実B技法によって成形されている。しかし、弓をもつ腕のみ中実技法により成形されている。挂甲表現の線刻は縦に直線を引いた後に連続弧形線刻を施しているが、常陸中央部でみられる線刻表現のように比較的直線に近い格子状線刻に類似した表現がなされている(第5図:9)。

#### (4) N4群

吹上古墳群は久慈川河口左岸の台地上に位置し、円墳3基と前方後円墳の可能性のある1基から構成されるが、全て現存しない。1号墳は直径17mの円墳で墳丘は削平され、円筒、朝顔、

人物埴輪が出土している。古墳の年代は6世紀末葉とみられ、男子上半身が2体出土している。いずれも顔面を欠損しているが、頭上部の内面には輪積み痕が残っている。すでに復元されている人物埴輪の1体の肩は中空成形とみられるが、比較的長い前腕部を差し込んでいる。また、表現に関しては眉と鼻が連結してT字形を呈する特徴的な形をしており、目は細く木の葉形に切り込まれていることから、表現・技法ともに中央部の影響が窺われる。

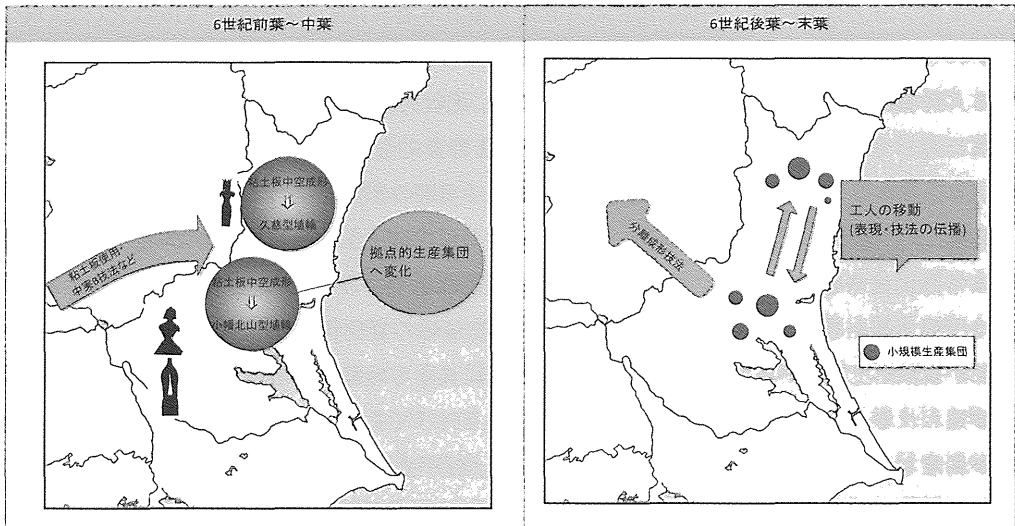
最後に、一騎山4号墳の破片資料に関して複数の製作技法を指摘しておきたい。一騎山4号墳は常陸大宮市の台地上に位置する42mの前方後円墳である。前方後円墳は4号墳のみで、他は円墳9基からなる10基の古墳群である。人物埴輪の資料数は少ないが、残存状態の良い頭部が複数出土している。個々に表現・技法ともに異なる特徴があることから、複数工人の影響が窺われる。まず、頭部は頸部外面に粘土を貼り付けて丸く成形しているが、貼り付けた粘土が剥離しているのがみられる(第5図:10)。挂甲表現には、格子形と連続弧形の両形状があるが、むしろ北部で受け継がれてきた連続弧形線刻が簡略化されて直線的に近い表現になったと考えられる。腕は中実技法によるものが大半を占めているが、中空成形のものも1点みられる(第5図:12)。胴部に差し込む端部はナデにより曲面的に成形されるなどの特徴から、前述の吹上1号墳と同様に中央部からの影響を強く受けていると推察される。

### 3. 製作技法と埴輪製作工人(第6図)

ここまで、実見結果をもとに埴輪の表現と製作技法について検討してきた。次に、それらの埴輪を製作していた工人に関して考察したい。まず、5世紀末葉から6世紀初頭段階の常陸では、北部と中央部の各地域で古墳間の埴輪の作風は異なっていた。ただし、川子塚古墳と三味塚古墳から出土した資料の腕や裾部の製作技法にみられるように、板状粘土を使用して成形する方法は両地域で観察された。全身像と半身像であるため同一部位として比較することはできないが、家形埴輪などの形象埴輪のように、平面で構成される器種は板状粘土を使用して製作していたことに起因すると考えられる。そこから粘土紐を用いて滑らかな曲面を製作する段階に移行したため、中空成形技法が発展していったと捉えられる。また、粘土紐の貼り付けにはナデつけが粗雑な点が多く、目や口を楕円形に小さく穿孔している点や指の製作技法には工具などを使用しないことから、造形・作風の単純さが窺われる。

しかし、次の6世紀前葉から中葉には共通表現・技法による埴輪の数が増加し、各地域の埴輪に在地的な要素が加わる。一方、中央部では人物埴輪が大型化するとともに上下半身分離成形技法による製作が開始され、両地域ともに武人埴輪の占める割合が増加する。また、腕の製作技法以外に頭部製作技法に関しても大きな違いがみられた。この時期の中央部の埴輪は基本的に内面には全てナデを施すが、これとは対照的に、北部では頭部製作に関しては胴部から連続して小型の頭部を巻き上げによって成形している。このため、北部の埴輪は内面にほとんどナデを施していない。

最終段階の6世紀後葉から末葉においては、前代に北部と中央部の各地域で盛行した埴輪製



第6図 製作技法と工人の移動

作技法が部分的に混在することが確認できる。古墳からの埴輪出土数も数少ないことから、工人集団の規模自体が縮小したことが推察される。また、中央部の二子塚古墳の埴輪が例として挙げられるが、三角錐帽は連続成形されている。さらに、北屋敷2号墳と西町古墳から出土した上腕部は、中空の上腕部に差し込む前腕部を長くした中空C技法によって成形されている。この時期には中実A技法の腕の埴輪が増加することから、前代の小幡北山型埴輪の表現・製作技法を踏襲しつつ、簡略化され次第に中実技法を取り入れていったとみられる。一方、北部の一騎山4号墳の武人埴輪には、目の形態が久慈型の特徴である半月形を呈する一方で、中空B技法の上腕部や格子状線刻などの点で、中央部の特色が強まる。

以上の流れを整理すると、まず、初期の人物埴輪生産は大型の前方後円墳に工人が個人差のある技法を用いて埴輪を製作していたとみられる。外的な影響を受けて北部と中央部でほぼ同時期に埴輪の生産が開始されたが、6世紀前葉から中葉にかけては各地域の在地で創出された製作技法によって、広範囲に大量供給できる体制が整備されたといえよう。6世紀後葉以降は埴輪表現のみでなく製作技法についてもそれまでの一定の地域範囲を超える交流があったものとみられる。すなわち、工人が二つの地域を移動することで製作技法が相互干渉するようになり、各埴輪工人が個々に少数の埴輪を製作し立て並べたと考えられる。

## V. 古墳の築造と埴輪生産

人物埴輪が製作される古墳時代後期以前は、常陸においては石岡市舟塚山古墳や水戸市愛宕山古墳など大規模古墳が築造されていたが、その後は前方後円墳などの墳丘規模が縮小する。その段階に人物埴輪が生産され始めるが、まだ少数の工人によって埴輪生産が開始された直後とみられる。そのため表現に関してほぼ類似性はなく、むしろ簡素な技法を用いて製作し、外

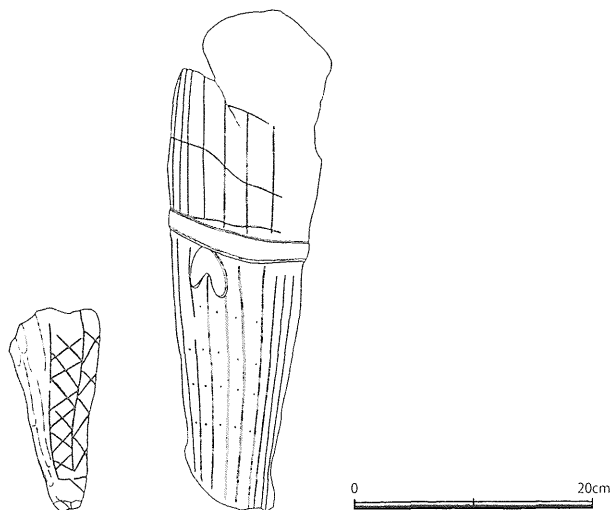


来の工人と在地の工人との協業により成立していたため工人差が表れたといえよう。

6世紀前葉段階は人物埴輪の作風が統一されることから、地域首長の下で生産供給が行われていたことが明らかである。中央部では舟塚古墳のような地域首長墓の古墳に供給するために専門工人集団が編成されたと考えられる。一方で北部においては、拠点的生産遺跡の操業によって円墳群にも埴輪の供給を開始した。つまり、首長墓に対する供給のみを目的としていなかったと解釈できる。また、この時期の人物埴輪は女子ではなく武人が多数を占めることから、被葬者に仕えた軍事集団を古墳の外側に向けて誇示するという目的があったと考えられる。舟塚古墳に代表されるように、墳丘企画や副葬品からは被葬者には畿内から直接的影響を受けた人物像が窺われるが、埴輪生産に関しては在地で独自に発展させた要素が強い。しかし、上腕部を中空に成形する技法は多くの古墳で継承されていることから、在地の工人が外来の工人の指導を受けて基本的要素を残しつつ発展させたとみるのが穏当である。このような大量に生産された人物埴輪にほぼ共通の作風表現と技法が共有されているという状況から、熟練工人集団による製品と判断される。すなわち、在地首長の元に一元的に編成された専門集団の存在をうかがわせるものである。

しかし、この集約化された体制はごく一時的なものであり、直後に工人集団と地域首長の関係に変化が起きたとみられる。これは、6世紀中葉から後葉にかけての築造地域の階層化や小規模前方後円墳の築造など、被葬者の階層を反映した変化から読み取れる。これに伴い製作工人の移動によって在地的な技法が用いられた埴輪が各地でみられるようになり、円墳群が人物埴輪の供給対象になる。6世紀末葉になると陸路が整備されたことによって、地域首長はそれまで拠点としていた水上交通の要衝ではなく陸路交通の経路に古墳を築造し、地域首長に対する埴輪の供給は停止する。しかし、地域の首長墓のような大型古墳ではなく小型の円墳を対象として供給するなど、規模を縮小しながら活動は続いていた。その結果、小型古墳の被葬者が少数の工人集団に対して埴輪を発注し、表現・技法ともに簡略されて様々な要素が取り入れられた埴輪が供給されていたといえる。後期から終末期にかけての古墳では武人埴輪の出土数が減少し、代わって正装男子が増加することからも、人物埴輪を立て並べる意味が形骸化したことが窺われる。このような人物埴輪からは、被葬者自らをモデルにした埴輪が製作されたことも想定される。

人物埴輪群の中心的人物像の存在については過去にも議論がなされているが、ここでは、特に杉山晋作による研究(杉山2008a)を挙げておきたい。杉山は千葉県木戸前1号墳を例に、数体ある男女の人物埴輪の中で男女各1体が他の人物埴輪よりも大きく作られていることに着目し、埴輪造形者が独断で特異な像を案出したのではなく、背景として発注者の意思があった可能性を指摘している。このような特徴は、先に挙げた舟塚古墳出土資料にもみられる(第7図)。多数の上腕部の中で、この資料のみに線刻が施されている。格子状線刻だけでなく刺突工具を用いた表現がなされる脚部も少なくとも1点は存在することから、その部位を含む1体ないし2体の表現の異なる埴輪が存在したのであろう。古墳が被葬者の活動地域内における有



第7図 舟塚古墳出土人物埴輪 腕部(左)・脚部(右)

力首長墳と考えられるという点からも、この埴輪は埴輪群像の中心人物あるいは被葬者の姿を模したものである可能性が想定される。このように、人物埴輪群像をとらえる上では、表現と製作技法が埴輪群像の中で異なるものを分析することが今後は必要になると思われる。そのために、今後は同一工人による製品の分析は古墳から出土した全ての埴輪に対して行うべきであると考えられる。

## VI. 結論と課題

本稿では、製作技法から埴輪の共通性を把握することで埴輪の供給先である首長墓と工人集団に関する検討を試みた。常陸と同時期に埴輪生産が盛んに行われた上野及び北武蔵からの影響<sup>2)</sup>まで研究を広げることが今後の課題である。特に、山崎武によって埼玉県千光寺1号墳出土の人物埴輪の腕には常陸北部と同様の中実B技法がみられることから、埼玉地域周辺で成立したかあるいは先進地域からの技術導入があつて出現した可能性が高いことが指摘されている(山崎2004)。これらの事例も含め、円筒埴輪の刷毛目を含めさらなる分析から工人集団の関東圏内における移動を示す積極的な根拠が示されることが望まれる。これらの地域における同一表現・技法を検証することで、他地域から埴輪生産が関東東へ伝播・定着するまでの過程を補足し、古墳時代後期社会の一端を解明することも可能と考える。

## 謝辞

本稿は2010年度に筑波大学大学院に提出した中間評価論文の一部を修正したものである。起稿にあたっては、指導教員である常木晃先生をはじめ、諸先生方に多大なご指導をいただいた。また、資料の実見に当たっては次の方々にお世話になった。末筆ながら記して御礼申し上げます。

糸川 崇、稲田健一、大津郁子、片平雅俊、川上みね子、忽那敬三、佐藤正好、曾根俊雄、長谷川聡(五十音順、敬称略)

## 註

- 1) 埼玉県生出土遺跡からの遠距離供給に関しては、元荒川から利根川に出て多摩川を遡る経路が想定されている。
- 2) 稲村繁は群馬県から出土した一部の武人埴輪に茨城県中央部の埴輪との類似点を指摘している(稲村1999)。

引用・参考文献

- 新井 悟 2000 「茨城県玉里村舟塚古墳の再測量報告—霞ヶ浦沿岸の前方後円墳における今城塚型の築造規格の受容形態の検討—」『駿台史学』109 駿台史学会 135-147 頁。
- 市毛 勲 1985 「人物埴輪における隊と列の形成」『古代探叢』Ⅱ 早稲田大学出版部。
- 茨城県教育庁社会教育課（編）1959 『茨城県古墳総覧』。
- 犬木 努 1995 「下総型埴輪基礎考—埴輪同工品論序説—」『埴輪研究会誌』第1号 埴輪研究会 1-36 頁。
- 犬木 努 1996 「埴輪製作における個体内・工程別分業と種類別分業」『埴輪研究会誌』第2号 埴輪研究会 1-30 頁。
- 犬木 努 2003 「同工品識別をめぐる諸問題」『埴輪』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会。
- 井上義安 1989 『小幡北山埴輪製作遺跡第一次～第三次調査報告』。
- 井上義安編 1995 『北屋敷古墳』水戸市教育委員会。
- 稲村 繁 1990 「茨城県の形象埴輪—人物埴輪を中心に—」『第3回特別展 常陸の埴輪』土浦市立博物館。
- 稲村 繁 1999 『人物埴輪の研究』同成社。
- 稲村 繁・森 昭 2002 『人物はにわの世界』同成社。
- 稲村 繁他 2006 『常陸茅山古墳』東海村教育委員会。
- 茨城県教育委員会 1962 『太田山埴輪窯跡調査 茨城県常陸太田市新宿町元太田山所在』茨城県教育委員会。
- 岩崎卓也 1992 「関東地方の前方後円形小墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』44集 国立歴史民俗博物館。
- 大塚初重・小林三郎 1968 「茨城県舟塚古墳」『考古学集刊』第四卷第一号 東京考古学会 93-114 頁。
- 大塚初重・小林三郎 1971 「茨城県舟塚古墳Ⅱ」『考古学集刊』第四卷第四号 東京考古学会 57-102 頁。
- 大塚初重 1974 「梵天山古墳」『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』茨城県。
- 大塚初重・小林三郎 1976 『茨城県馬渡における埴輪製作址』明治大学考古学研究室。
- 大塚初重 1989 「まとめ」『小幡北山埴輪製作遺跡』茨城町教育委員会。
- 大森信英 1955 『常陸国村松村の古代遺蹟』村松村教育委員会。
- 霞ヶ浦町教育委員会 1992 『発掘調査報告書 富士見塚古墳』。
- 勝田市教育委員会 1975 『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書』。
- 木沢直子・茂木雅博編 1993 『常陸白方古墳群』東海村教育委員会。
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会。
- 黒澤彰哉・平賀康意編 2004 『茨城の形象埴輪』茨城県立歴史館。
- 黒澤彰哉 2005 「常総地域における古墳埋葬施設の特徴」『婆良岐考古』第27号。
- 黒澤彰哉 2008 「ある跪く人物埴輪のふるさと」『婆良岐考古』第30号 婆良岐考古同人会。
- 黒澤彰哉 2010 「腕の製作技法と顔の作風から見た茨城の人物埴輪」『茨城県立歴史館報』37 茨城県立歴史館。
- 黒澤彰哉 2010 「推定今泉愛宕山古墳出土の人物埴輪（その2）」『婆良岐考古』第32号 婆良岐考古同人会。
- 車崎正彦 1980 「常陸久慈の首長と埴輪工人」『古代探叢』。
- 小橋健司・櫻井敦史他 2004 『市原市山倉古墳群』市原市埋蔵文化財センター。
- 近藤義郎編 1991-2000 『前方後円墳集成』山川出版社。
- 斉藤 忠他 1960 『三味塚古墳』茨城県教育委員会。
- 斉藤 新 2000 「ひたちなか市川子塚古墳出土の円筒埴輪について（1）」『埴輪研究会誌』第4号 埴輪研究会。

- 佐々木憲一・古屋紀之 2002 「茨城県新治郡玉里村雷電山古墳・舟塚古墳周辺測量調査報告」『駿台史学』第115号 97-114頁。
- 佐々木憲一・田中 裕編 2010 『常陸の古墳群』六一書房。
- 白石真理 1991 「馬渡埴輪製作遺跡・小幡北山埴輪製作遺跡」『考古学ジャーナル』331 ニューサイエンス社。
- 白石真理 1995 「馬渡埴輪窯跡とその周辺」『シンポジウム 縄文人と貝塚 関東における埴輪の生産と供給』学生社 115-120頁。
- 塩谷 修 1990 「茨城県における埴輪の出現と展開 円筒埴輪を中心に」『常陸の埴輪 埴輪が語る古墳時代の常陸』第3回特別展図録 土浦市立博物館。
- 塩谷 修 1997 「霞ヶ浦沿岸の埴輪—5・6世紀の埴輪生産と埴輪祭祀—」『第19回特別展 霞ヶ浦の首長・古墳にみる水辺の権力者たち』霞ヶ浦町郷土資料館 66-75頁。
- 城倉正祥 2004 「製作組織からみた埴輪の形態変化」『遡航 早稲田大学文研考古誌』第22号 51-70頁。
- 城倉正祥 2005 「同工品分析による埴輪製作組織の復元」『埴輪研究会誌』第9号 埴輪研究会 69-87頁。
- 城倉正祥 2006 「朝日の岡古墳出土埴輪をめぐって」『埴輪研究会誌』第10号 埴輪研究会。
- 城倉正祥 2007 「北武蔵の埴輪生産と地域社会」『史観』第157冊。
- 城倉正祥 2009 『埴輪生産と地域社会』学生社。
- 杉山晋作 2008a 「人物埴輪の表現・情景そして効果場面」『埴輪の風景～構造と機能～』六一書房 45-56頁。
- 杉山晋作 2008b 「殿塚古墳・姫塚古墳出土の人物埴輪の造形技法」『埴輪研究会誌』第12号 埴輪研究会。
- 鈴木裕芳 1987 『赤羽横穴墓群 B 支丘一号墓の調査付篇西大塚古墳群』日上市教育委員会。
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店。
- 玉里村史編纂委員会 2006 『玉里村の歴史：豊かな霞ヶ浦と大地に生きる』。
- 高根信和他 1974 『常陸一騎山』大宮町教育委員会。
- 高橋克壽 1994 「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第2号 27-48頁。
- 高橋克壽 2008 「王権と埴輪生産」『埴輪群像の考古学』青木書店。
- 高橋健自 1926 『埴輪及装身具』雄山閣 30頁。
- 高根信和他 1974 『常陸一騎山』大宮町教育委員会。
- 高根信和・佐藤政好・海老沢稔 1977 『幡山遺跡発掘調査報告』常陸太田市教育委員会。
- 武田佐知子 1984 「律令制下の農民の衣服」『古代国家の形成と衣服制』吉川弘文館。
- 塚田良道 1996 「人物埴輪の形式分類」『考古学雑誌』81-3 271-311頁。
- 塚田良道 2007 『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣。
- 伝田郁夫 2001 「霞ヶ浦西部の埴輪における2, 3の考察」『埴輪研究会誌』第5号 埴輪研究会 7-16頁。
- 伝田郁夫 2002 「霞ヶ浦高浜入り周辺の埴輪生産の展開とその特質」『駿台史学』第116号 79-106頁。
- 日高 慎 1994 「人物埴輪の共通表現とその背景」『筑波大学 先史学・考古学研究』第6号 1-29頁。
- 日高 慎 1995 「(書評) 高橋克壽 埴輪生産の展開」『埴輪研究会誌』第1号 埴輪研究会。
- 日高 慎 1996 「人物埴輪表現の共通性」『考古学雑誌 西野元先生退官記念論文集』187-204頁。
- 日高 慎 1999 「人物埴輪の共通表現検討とその有効性」『埴輪研究会誌』第3号 埴輪研究会 1-17頁。
- 日高 慎 2000 「茨城県における埴輪の様相」『古墳と埴輪』群馬県教育委員会 30-33頁。
- 日高 慎 2006 「『型』成立の実体」『埴輪づくりの実験考古学』学生社 85-99頁。
- 日高 慎 2008 「人物埴輪の東西比較—論点の抽出—」『埴輪研究会誌』第12号 埴輪研究会 19-37頁。
- 増田逸朗・市川 修 『千光寺』埼玉県遺跡調査会報告 第27集。
- 茂木雅博他編 2006 『常陸茅山古墳』東海村教育委員会。

- 山崎 武 2004 「埼玉県岡部町千光寺一号墳出土の埴輪について」『幸魂—増田逸朗氏追悼論文集—』。
- 吉田恵二 1973 「埴輪生産の復元」『考古学研究』第19巻第3号 30-48頁。
- 若狭 徹 2002 「人物埴輪様式論」『季刊考古学』第79号 雄山閣 56-60頁。
- 若松良一 1998 「人物・動物埴輪」『古墳時代の研究9 古墳Ⅲ 埴輪』雄山閣 108-133頁。
- 若松良一 2003 「埴輪と木製品からみた埋葬儀礼」大塚初重・吉村武彦編『古墳時代の日本列島』青木書店 51-84頁。
- 若松良一・日高 慎 1992 「形象埴輪の配置と復元される儀礼」『調査研究報告』第5号 埼玉県立さきたま資料館 3-20頁。
- 若松良一 2007 「形象埴輪祭祀の構造と機能」『シンポジウム 埴輪の構造と機能』37-56頁。

#### 図版引用文献

- 第1図 筆者作成。
- 第2図 大塚・小林1971第23図，稲村他2006第30図を再トレース。
- 第3図 筆者撮影。
- 第4図，第5図 下記の各機関の協力を得て筆者が撮影した（スケール不同）。4-1-3茨城県立歴史館，4-4-6明治大学博物館，4-10，11鹿嶋市ときどきセンター，4-7，8水戸市教育委員会，4-9石岡市教育委員会，5-4，6，7東海村教育委員会，5-1-3，5-8ひたちなか市埋蔵文化財センター，5-9日立市郷土博物館，5-10-12常陸大宮市歴史民俗資料館。
- 第6図 筆者作成。
- 第7図 筆者実測，トレース。
- 第1-3表 筆者作成。

The Late Kofun Period in Hitachi:  
Research on the Production Technique of Human Shaped Haniwa

OHMURA, Fuyuki

The main objective of this thesis is to investigate the production technique of human shaped haniwa in the Eastern Kanto region. The author analyzed the movement of haniwa artisans associated with Kofun construction projects during the late Kofun period of the 6th century. The author also analyzed haniwa production during Kofun construction projects.

The aim of this thesis is to understand the political relationship between two regions in Hitachi by studying groups of workers who made tombs for the head of a local community. There are two areas in north and central Hitachi where many kofun and haniwa were made. In the past, human shaped haniwa were analyzed through observation of the external characteristics only and their interior was not a subject of investigation. The author studied the production techniques of human shaped haniwa, particularly how the head and arms were made, for example, if there were any traces of wound clay or pasted-together clay board present. This analysis revealed that several groups of haniwa craftsmen supplied haniwa for one kofun at the same time. This suggests that haniwa craftsmen from each region introduced techniques from outside the local community implying an interregional exchange between local heads.

As a result, the author concluded that craftsmen from other regions directly introduced basic haniwa production techniques to Hitachi. Next, local governments gathered haniwa craftsmen, so that the production of haniwa was gradually consolidated in each region. Later, regional techniques began to mix and were simplified. At the same time, Kofun size downscaled in stages. Eventually, the production of haniwa came to an end with the gradual decline of a system dominated by local government heads.